東海学園大学教育研究紀要　第２号：156-161，2016

養護教諭養成課程における保健科教育法の実践報告

山田浩平 *・林　典子 **・田中滉至 ***・原　郁水 ****・村松常司 *****

Key words：保健科教育法、養護教諭養成課程

Ⅰ　はじめに

大学における養護教諭養成課程の多くは、養護教諭の免許状とともに保健体育科の保健免許状の取得も可能である。そのため、この保健の免許取得希望者は、大学にて保健科教育法の講義を履修することになる。また、平成10年に教員職員の免許法の一部改定により、養護教諭の免許を有し 3 年以上の勤務経験のある現職教諭は、校長の許可が得られれば当分の間その勤務する学校において保健体育科の保健科（保健授業）を担当できる。

このように、養護教諭を取り巻く保健授業の実施に関わる環境は変わりつつある。しかしながら、筆者ら[1) 2)]が養護教諭志望者に対して、保健授業に関する意識を調査すると、授業についての重要性、授業への協力については肯定的に捉える者が多かったが、保健授業のイメージについては否定的な内容が多かった。また、授業実施に対する自信では 3 割の者しか自信があると答えていなかった。

一方、筆者ら[3)]が現職の養護教諭を対象に保健授業の実情を把握したところ、目標を設定した者は 9 割であったものの、授業の実施後に何らかの評価を行っている者は、約 5 割であった。さらに、授業後に評価をしている者は、体験学習や「科学的知識」を取り入れた指導を行う割合が有意に高く、授業目標を設定していた。

これらの結果からは、今後学生が保健授業の担当者として保健知識の習得の必要性を実感できるような機会や授業を実践できるように工夫していくことが重要であるとともに、目標の設定や評価の仕方等についても講義で取り扱う必要がある。なお、養護教諭希望者が保健科の免許を取得するためには、大学にて保健科教育法の講義をⅠ、Ⅱ、Ⅲ、Ⅳまでの 4 つを履修しなくてはならない（各15コマずつ）。

本研究では、保健科教育法の講義の充実を目指し、本学にて行われた保健科教育法のⅠ～Ⅳの内容を紹介するとともに、2016年に実施された保健科教育法のⅠ、Ⅱの評価資料を分析し、今後の充実した講義のための基礎資料を得ることを目的とする。

Ⅱ　講義のシラバス

保健科教育法は 2 人の教員で分担して担当し、Ⅰ，Ⅱ（2 年時）で 1 人、Ⅲ，Ⅳ（3 年時）で 1 人が担当した（表 1 、 2 ）。主な学習内容は、保健科教育法Ⅰでは教科教育の基礎と小学校の内容を、Ⅱでは中学校の内容を、Ⅲでは高等学校の内容を、Ⅳでは主に教材づくりや模擬授業などの演習を主に行った。

* 愛知教育大学教育学部准教授、東海学園大学教育学部非常勤講師、** 東海学園大学教育学部客員教授
** 愛知教育大学大学院大学院生、**** 弘前大学教育学部講師、***** 東海学園大学スポーツ健康科学部教授・学部長

表 1．保健科教育法ⅠⅡのシラバス

保健科教育法Ⅰ	保健科教育法Ⅱ
授業概要 ・「保健科教育」の担当教員の役割と職務内容を押さえながら、ヘルスプロモーションの理念をもととした「保健科教育」の教育内容及び指導法などの基本的能力を身につける。 ・保健科教育法Ⅰは、中学校及び高等学校免許状（保健）を取得するための必須科目である。本講義を通して、授業づくりに必要な基礎的な知識や考え方を身につける。	授業概要 ・「保健科教育」の教育内容、具体的な指導方法、教材作り、授業作り、評価方法を学習する。 ・授業演習や教材つくり、学習指導案の作成を行う。
到達目標 ・「保健科教育」内容の意義・目標（ヘルスプロモーションの理念）・内容（構成と系統性）・指導計画・学習指導方法を理解する。 ・よりよい授業づくりのために、学習指導要領の示し方、教材の工夫方法などの理解を深める。 ・「保健科教育」担当教員に必要な授業観を進んで習得する。	到達目標 ・「保健科教育」内容の意義・目標・内容・方法・評価について説明できる。 ・授業演習やグループワークを通して、保健科教育の内容や指導方法について討議できる。 ・「保健科教育」担当教員に必要な指導観や指導方法を自らがリテラシーの視点（情報収集し、吟味し、活用する）で学ぶ。
授業計画 ＜第１週＞　オリエンテーション　学校における保健教育の意義 ＜第２週＞　保健教育とヘルスプロモーション ＜第３週＞　学習指導要領と保健科教育 ＜第４週＞　「保健科教育」の位置づけ ＜第５週＞　小・中・高の「保健学習」（系統性） ＜第６週＞　授業とは何をどうすることか① ＜第７週＞　授業とは何をどうすることか② ＜第８週＞　授業をイメージするには ＜第９週＞　指導計画と単元計画と指導案 ＜第１０週＞　演習①　学習指導案づくり ＜第１１週＞　演習②　学習指導案づくり ＜第１２週＞　演習③　教材づくり ＜第１３週＞　演習④　ワークシートづくり ＜第１４週＞　模擬授業① ＜第１５週＞　模擬授業②	授業計画 ＜第１週＞　オリエンテーション ＜第２週＞　中学校の保健教育① ＜第３週＞　中学校の保健教育② ＜第４週＞　指導技術とは①　「発問」 ＜第５週＞　指導技術②　「板書」 ＜第６週＞　評価の観点　板書計画 ＜第７週＞　演習③　学習指導案に基づいた教材・ワークシートづくり ＜第８週＞　演習①　学習指導案づくり ＜第９週＞　演習②　学習指導案づくり ＜第１０週＞　学習指導案の検討① ＜第１１週＞　学習指導案の検討② ＜第１２週＞　模擬授業①] ＜第１３週＞　模擬授業①の振り返り ＜第１４週＞　模擬授業②の振り返り ＜第１５週＞　学習指導案の修正

表 2．保健科教育法ⅢⅣのシラバス

保健科教育法Ⅲ	保健科教育法Ⅳ
授業概要 「保健」担当教員の役割と職務内容などに触れながら、教職の意義について理解し、自らの教職への意欲や適性を認識する。更に、教員免許状を習得すること、教育実習を充実したものにするための準備として、「保健」の教育内容及び指導法などの能力を身に付ける。	授業概要 「保健」の教育内容、具体的な指導方法、教材づくり、授業づくり、評価のあり方などについて詳述する。更に、学習者による模擬授業や教材づくり、学習指導案の作成を行う。
到達目標 ・教科としての「保健」の意義、目標、内容、指導計画、学習指導方法、評価を説明できる。 ・「保健」担当教員に必要な優れた授業観を自ら進んで形成できる。	到達目標 ・保健科教育の意義、目標、内容、方法、評価について、保健授業の問題点と関連づけながら説明できる。 ・模擬授業やグループワークを通して、他の受講生と保健科教育の内容や指導方法について討議できる。 ・「保健」担当教員に必要な優れた授業観や指導方法を自ら進んで形成できる。
授業計画 ＜１週＞　オリエンテーション、生涯健康教育と学校健康教育との関連 ＜２週＞　保健科教育法の意義、目的 ＜３週＞　保健教育の歴史と学習指導要領の変遷 ＜４週＞　教育課程における保健科教育の位置づけ ＜５週＞　学校保健と保健科教育 ＜６週＞　学習指導要領の基本的な考え方 ＜７週＞　小・中・高等学校高等学校の保健学習 ＜８週＞　指導計画・年間指導計画、単元計画（１） ＜９週＞　指導計画・年間指導計画、単元計画（２） ＜10週＞　保健科教育の学習指導法（１） ＜11週＞　保健科教育の学習指導法（２） ＜12週＞　学習指導案の意義、作成の仕方（１） ＜13週＞　学習指導案の意義、作成の仕方（１） ＜14週＞　保健科教育の評価 ＜15週＞　まとめ	授業計画 ＜１週＞　オリエンテーション、現代的健康問題 ＜２週＞　学習指導案の検討 ＜３週＞　学習指導案の検討 ＜４週＞　学習指導案の検討と検討点の発表 ＜５週＞　授業書方式による学習指導案とは ＜６週＞　素材の加工（教材化） ＜７週＞　授業評価のための教材紹介（１） ＜８週＞　授業評価のための教材紹介（２） ＜９週＞　授業評価のための教材作成 ＜10週＞　保健学習における多様な指導法（１） ＜11週＞　保健学習における多様な指導法（２） ＜12週＞　保健学習における多様な指導法（３） ＜13週＞　授業づくりの工夫と展開（１） ＜14週＞　授業づくりの工夫と展開（２） ＜15週＞　授業づくりの工夫と展開（３）

Ⅲ　講義で使用した資料

1．講義内で使用した資料

保健科教育法Ⅰ～Ⅳのすべてで使用した図書は、小・中・高等学校の学習指導要領解説保健体育編[4) 5) 6)]と各校種の教科書である。これに加えて、講義ごとに適宜プリントを配布し、講義を行った。

2．講義の評価で使用した資料

講義の評価にあたっては、講義最終日（16 週目）のペーパーテスト（最終試験）に加えて、毎回の講義時にノート（表 3 参照）を作成させ、教授した学習内容を記述させるとともに、各講義内容についての感想文を記述させ、2 つの観点から評価を行った。具体的には、自己評価として、「講義を真面目に受講することができたか」、「講義内容を理解できたか」について 5 段階で評価させ、学習ノートの評価として「学習内容の理解度」、「読みやすい文字か否か」、「文章力（学習内容を発展的に捉えているか否か）」について 6 段階で評価させた。さらに講義の最終日には、講義を振り返るために自己評価を行わせた。評価内容は、授業の履修態度、学習指導案、模擬授業について 10 段階で評価させ、KPT 分析を行わせた[7)]。即ち、K は Keep を意味し、良かった点やできた点について記述させ、P は Problem を意味し、問題点やできなかったことを記述させ、T は Try を意味し、今後どのようにしたいかや改善点を記述させた。

表 3．講義ノート

保健科教育法(2016春学期)	授業日（４月　７日）	学　習　内　容	
	氏名　○○　○○○	(5)勤労生産・奉仕的行事	
		例）　校内美化活動　福祉施設との交流活動　等	
テーマ　学校保健における「保健科教育」の位置づけ	キーワード　特別活動、行動変容、連携	③　児童会活動	
学　習　内　容		(1)児童会の計画や運営	運営は、主として
		(2)異年齢集団による交流	高学年の児童が行う
○　特別活動		(3)学校行事への協力	こと
・　児童生徒の発意や発想をを重視し、啓発する	▹啓発		
・　「なすことによって学ぶ」を基本とする	・・・人が気づかずにい	④クラブ活動	
	ことを教え示して、より	(1)クラブの活動や運営	主として第４学年以
①学級活動	高い認識・理解に導く	(2)クラブを楽しむ活動	上の同好の児童をも
(1)学級や学校の生活づくり	こと	(3)クラブの成果の発表　協働	って組織する
→　児童生徒の自主性を育てる		チーム学校	
(2)日常生活や学習への適応及び健康安全	▹自主性	報　連　相　協　実 ▶ 目標・課題解決	▹連携
ア.　希望や目標をもって生きる態度の育成	・・・他からの指示や		・・・互いに連絡をと
イ.　基本的な生活習慣の形成	によらず、なすべき	情報連携 → 行動連携	協力して物事を行う
ウ.　望ましい人間関係の形成	ことを自分の意思に		こと
エ.　清掃などの当番活動等の役割と働くことの意義の理解	基づいて行うさま	テーマ（学習内容）に関しての自分の感じたこと（感想・考え）	
オ.　学校図書館の利用		社会や組織の中で、「ほうれんそう」という言葉ばがあり、「ほう」は報告、	
カ.　心身ともに健康で安全な生活態度の形成	意識改革	「れん」は連絡、「そう」は相談という意味をなしている。私は、その中に	
キ.　食育の観点を踏まえた学校給食と望ましい食習慣の形成	↓	「かく」(＝確認)という言葉を加えてもよいと思う。”チーム学校”というよう	
	実践	に、学校という組織の中で、全教職員が共通理解を図ることに非常に重要な	
→　各学級の「実態」を明らかにして行動変容させる	↓	行動があると考える。共通理解を持つことによって、児童生徒や保護者、地	
	定着	域の方からの信用を得られる。確認作業は、教師間だけではなく、教師と保	
②学校行事		護者や学校と地域など様々な形がある。	
(1)儀式的行事		家庭や地域との連携を図ることにより、健康課題を明らかにすることや、解決	
例）　入学式　卒業式　始業式　終業式　修了式　等		の糸口を発見できる可能性が大きい。私たちには、そうした連携の必要性が	
(2)文化的行事		求められていると感じた。	
例）　学芸会　学習発表会　音楽鑑賞会　演劇鑑賞会　等		自己評価　☆授業を真面目に受けることができた　○5　4　3　2	検印
(3)健康安全・体育的行事		自己評価　☆授業内容はしっかり理解できた　○5　4　3　2	
例）　健康診断　避難訓練　運動会　球技大会　等		学習ノート評価　○学習内容の理解　A　A'　B　B'　C　C'	
(4)遠足・集団宿泊的行事		学習ノート評価　○読みやすい文字か　A　A'　B　B'　C　C'	評価
例）　修学旅行　野外活動　集団宿泊活動　等		学習ノート評価　○文章力（学習内容を発展的に捉えているか）　A　A'　B　B'　C　C'	A　A' B　B' C　C'
		学生番号　氏名	
※学生のノートの内容を入力し直したものです			

Ⅳ　ノートの記述結果

講義履修者に対して、毎講義後に①ノート裏面の講義に対する自己評価、②学習ノートの評価、③総合評価について評価させた。まず、①講義に対する自己評価について、図 1 に示すような 2 つの視点から 5 段階で評価させたところ、講義履修者の平均スコア（5 点満点中）は、授業態度が 4.7 点、内容の理解度が 4.5 点であり、高い数字を示していた。

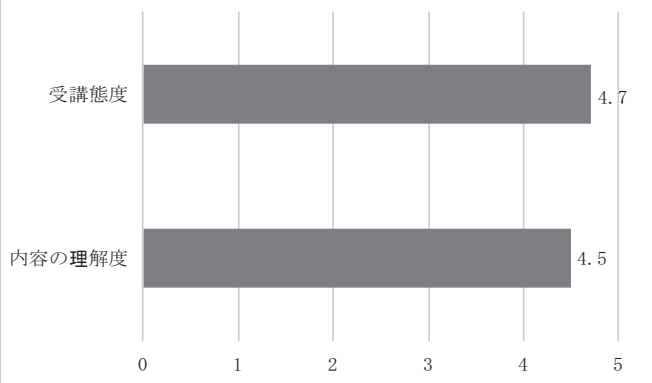


図１．講義の自己評価スコアの平均点　n=45

同様に、②学習ノートの評価について、図 2 に示すような 3 つの観点から 6 段階で評価させたところ、学習内容の理解は 4.0 点、文字の読みやすさ 4.4 点、文章力 4.6 点とまずまずの結果であった。また、③授業の総合評価を 6 段階で評価させたところ、平均スコアは 4.5 点であり、こちらも良好な結果であった。講義終了時には、授業者にノートを提出することになっているが、受講者のノートを読んでいても、講義を重ねるごとに文字は読みやすく、文章能力も高くなっている印象があった。

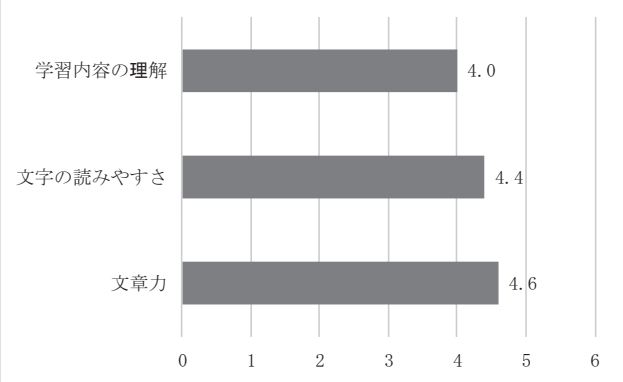


図２．学習ノートの自己評価の平均点　n=45

続いて、講義の感想文について文章を単文化してキーワードを拾ってみた。その結果、最も多かったのは「講義の内容（板書の仕方など）についてよく分かった」など、知識・理解の観点からの感想であった。次いで多かったのが、「今後は○○していきたい」などの決意に関する内容、「新たな視点ができて嬉しかった」、「講義が楽しかった」などの関心・意欲・態度に関わる内容であった。さらに、講義の後半（15 コマの後半）には模擬授業を実施したが、模擬授業は学習者自身が考えて作成するため、「○○についてよく考えることができた」などの評価の観点である思考・判断・表現に関する記述も見られた。しかし、講義の前半での思考力や判断力に関する記述は少なく、今後はこの観点を重視した講義の方法を展開していく必要がある。

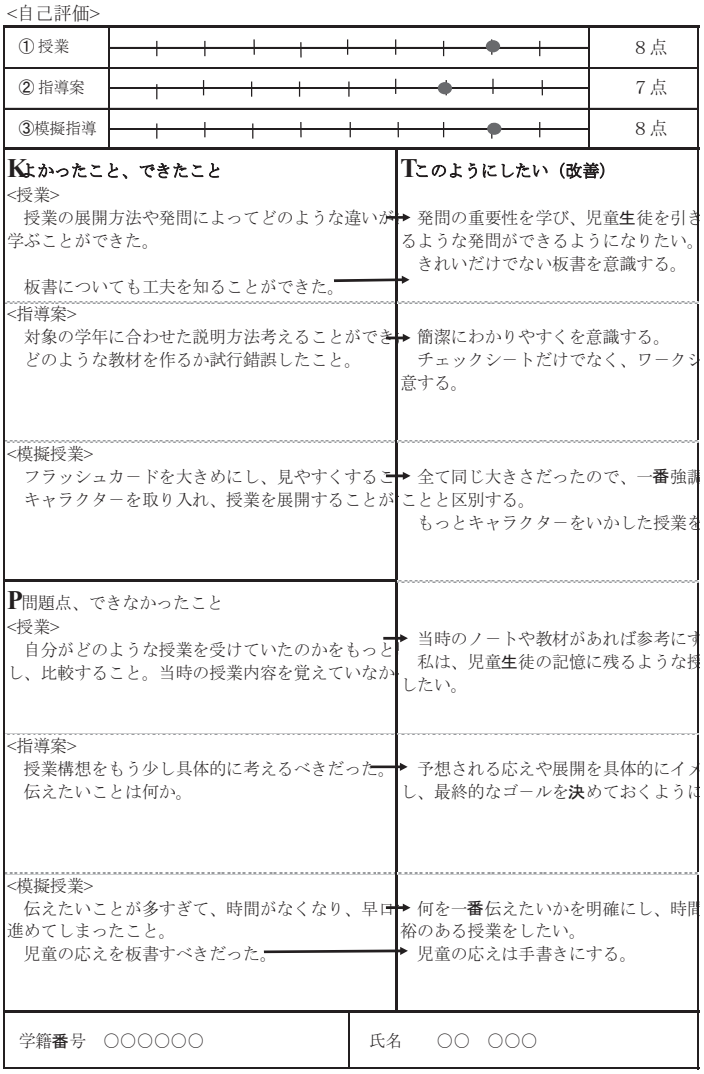
講義の評価（KPT 分析票）

V　KPT 分析の結果

15 コマの講義の終了時には、講義履修者に対して、①授業内容の理解度、②学習指導案、③模擬授業について 10 段階で評価させた。その結果、①授業内容の理解度の平均スコアは 8.3 点、②学習指導案 6.7 点、③模擬授業 6.0 点であり、講義内容の理解度は高かったものの、学習指導案や模擬授業の実施についての評価は低かった。この結果、講義の中で学習指導案や模擬授業の機会を増やしていく必要性を示唆している。

次に、KPT 分析（Keep：良かった点やできた点、Problem：問題点やできなかった点、Try：今後どのようにしたいかや改善点）について、講義の感想文と同様に記述内容を単分化して集計を行った。Keep では、講義に関わる内容として「講義ノートを活用できた」、「考えをまとめることができた」などが、学習指導案に関わる内容として「授業の目標が明確になった」、「要点を絞って作成できた」などが、模擬授業に関わる内容として「授業を体験できてよかった」、「教材を工夫することができてよかった」などの記述が見られた。

表 4．講義の評価（KPT 分析の結果）



<自己評価>

① 授業		8 点
② 指導案		7 点
③模擬指導		8 点

K よかったこと、できたこと	T このようにしたい（改善）
<授業> 授業の展開方法や発問によってどのような違いが学ぶことができた。 板書についても工夫を知ることができた。	発問の重要性を学び、児童生徒を引きるような発問ができるようになりたい。 きれいだけでない板書を意識する。
<指導案> 対象の学年に合わせた説明方法考えることができどのような教材を作るか試行錯誤したこと。	簡潔にわかりやすくを意識する。 チェックシートだけでなく、ワークシ意する。
<模擬授業> フラッシュカードを大きめにし、見やすくするキャラクターを取り入れ、授業を展開することが	全て同じ大きさだったので、一番強調ことと区別する。 もっとキャラクターをいかした授業を
P 問題点、できなかったこと	
<授業> 自分がどのような授業を受けていたのかをもっとし、比較すること。当時の授業内容を覚えていなか	当時のノートや教材があれば参考にす 私は、児童生徒の記憶に残るような授したい。
<指導案> 授業構想をもう少し具体的に考えるべきだった。 伝えたいことは何か。	予想される応えや展開を具体的にイメし、最終的なゴールを決めておくように
<模擬授業> 伝えたいことが多すぎて、時間がなくなり、早口進めてしまったこと。 児童の応えを板書すべきだった。	何を一番伝えたいかを明確にし、時間裕のある授業をしたい。 児童の応えは手書きにする。
学籍番号　○○○○○○	氏名　○○　○○○

Problem では、講義に関わる内容として「授業のスキルがあまり上達しなかった」、「前回の授業を振り返ることができなかった」などが、学習指導案に関わる内容として「時間や内容量を予測することができなかった」、「記述不足のとことがあった」などが、模擬授業に関わる内容として「早口になってし

まった」、「時間を超過してしまった」などの記述が見られた。

Try については、講義に関わる内容として「保健科の必要性をますます認識していきたい」、「授業のスキルを高めたい」などが、学習指導案に関わる内容として「学習内容を絞って簡潔にしたい」、「記述の工夫をしたい」などが、模擬授業に関わる内容として「教具を工夫したい」、「落ち着いて話すようにしたい」などの記述が見られた。

それぞれの分析から、問題点を今後の講義で修正したり、技能を身につけたりしたいといった内容が多く、保健科教育法ⅢやⅣでは、学習者のこれらの問題を解決すべく進めていく必要がある。

Ⅵ　まとめ

本研究では、保健科教育法の講義の充実を目指し、保健科教育法のⅠ～Ⅳの内容を紹介するとともに、2016 年に実施された保健科教育法のⅠ、Ⅱの評価資料を分析し、今後の充実した講義のための基礎資料を得ることにあった。

分析の結果、以下の点が明らかとなった。

1）講義履修者に対して、毎講義後に①ノート裏面の講義に対する自己評価、②学習ノートの評価、③総合評価について評価させたが良好な結果であった。

2）講義の感想文についてみると、知識・理解や関心・意欲・態度の観点からの感想は多かったが、思考・判断・表現に関する記述は少なかった。

3）KPT 分析（Keep：良かった点やできた点、Problem：問題点やできなかった点、Try：今後どのようにしたいかや改善点）についてみると、今後 Try していきたい点としては、Problem を克服したいといった内容が多く見られた。

以上のことより、今後の保健科教育法ⅢやⅣでは、講義ⅠやⅡでの問題点を克服したり、模擬授業などを積極的に取り入れ、授業のスキルを身につけたり、教材開発をしたりするような講義内容を検討する必要性が示唆された。

参考文献

1）山田浩平, 橋本みや子, 他：養護教諭が行う保健指導の実情, 愛知教育大学研究報告, 教育科学編, 63, 103-109, 2014

2）山田浩平, 河本祐佳：小学校教員志望者と養護教諭志望者の保健学習に対する意識の比較, 愛知教育大学教育創造開発機構紀要, 4 , 105-113, 2014

3）山田浩平, 藤原朋香, 他：養護教諭志望者と保健体育科教諭志望者の保健学習に対する意識の比較, 愛知教育大学教育創造開発機構紀要, 5 , 69-76, 2015

4）文部科学省：小学校学習指導要領解説体育編, 2008 http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/__icsFiles/afieldfile/2011/01/19/1234931_010.pdf

5）文部科学省：中学校学習指導要領解説保健体育編, 2008 http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/__icsFiles/afieldfile/2011/01/21/1234912_009.pdf

6）文部科学省：高等学校学習指導要領解説保健体育編, 2009 http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/__icsFiles/afieldfile/2011/01/19/1282000_7.pdf

7）林典子, 下村淳子, 他：スキルアップ養護教諭の実践力, 東山書房, 京都, 8-13, 2014

8）天野勝：これだけ！ KPT, すばる舎, 東京, 34-43, 2013